

政治幻想小説

西暦二〇〇〇年の中国

蘇明作

中嶋嶺雄 訳

西暦二千年、二十一世紀に起こり得る中国の悲劇とは何か？ 反体制誌「北京の春」に掲載された衝撃の書、完全翻訳成る！

● 訳者の言葉

中国では、去る十月十六日、いわゆる民主化運動のリーダーで反体制誌『探索』編集長・魏京生が北京市中級人民法院によって反革命罪で懲役十五年の刑に処せられた。同じく反体制誌として注目された『北京の春』は、わが国の一部にはすでに発行停止処分を受けたと報じられたが、依然として健在の模様で、去る六月中旬、北京

を訪れた私は西単の民主の壁（カット写真）で同誌の第五号、第六号を目撃することができた。その『北京の春』第五号に発表されたこの「政治幻想小説」は、中国民衆に衝撃を与え、同誌はたちまちにして売り切れたという。西暦二〇〇〇年には「党内ブルジョア階級」が一掃されて、今日の脱文革・非毛沢東化の政治潮流が根本的に否定され、中国の政治舞台が再び暗転するというストーリーは、タテマエとして「毛沢東思想」を護持しつつ他方では明らかに非毛



沢東化をはかり、「四人組」を毛沢東個人と切りはなして批判しながら、実際には毛沢東の権威を台なしにしつつあるという毛沢東への二重の背教がもたらす不安——民衆の深層心理を、鋭く衝いたものであった。

だが同時に「北京之音」は、鄧小平系統の影響下にある雑誌ではないかと一部で推測されていることが示すように、今日の非毛沢東化をさらに大胆に進めないかぎり、中国にはもはや将来がないことを主張する立場のものであり、読者は、その辺の含意を十分に汲みとるべきであろう。つまり、この「政治幻想小説」が描くような現実が再来しないためにも、さらに民主化と非毛沢東化をはかるべきだというのが、作者の真の意図だといえよう。

それにしてもこの「政治幻想小説」は鋭く中国社会の内面を抉っている。中国にもこの小説に見られるような思想が現存することを知らず驚かざるを得ないが、ともかく、この高度に洗練された政治的SFの全文をここに訳出したので、ぜひ最後まで読んでいただきたい。原題は「西暦二〇〇〇年に発生し得る中国の悲劇」（北京の春）一九七九年第五号）

八本文が述べる西暦二〇〇〇年には、それまでの中国を覆えす者が出て、「四人組」が名著を回復する……。ここに大胆に想定した一つの危険な局面は、これまでに毎回のように発生してきた情勢とわが国の体制的な病理に基づけば、決して可能性がないことではない。文中ではまた、一人の壁新聞作者が将来のこうした動乱のなかでたどる経過とその観点を記述した。これらの観点は、今日の中国の一般の人びとのなかに普遍的にゆきわたっている。

一九九八年十二月のある日。中央人民放送局は、通常の放送番組を停止し、一人のヴェテランのアナウンサーが、聴衆によく馴染まれた、しかし今日だけは特別に沈痛な声で、全世界に向けてみながつつと心配していたニュースを公表した——。

十五億人民が敬愛し、全世界人民が尊敬する中国の党と國家の指導者・某同志が病いのため医療の効なく、本日未明二時十三分に北京で逝去しました！

これは中国が一九九〇年代に入ってから発表したこの種の訃告のなかで人びともっとも重大な衝撃を与えるものである。

世を挙げて悲哀につつまれている。人民は彼が創始した事業のなかに生きており、彼は永遠に人民の心のなかに活きている。天安門広場は人の山、人の海となり、ある者は記念堂を建立するようにとの要求を出している……。

西単（北京市西長安街の一角——訳者）の民主の壁は全体が数百メートルの長さの黒い布で囲われた。

アメリカ、ユーゴスラヴィア、日本、フランス、ドイツ……などはみな特別の方式で哀悼の意を表した。米大統領特使が帯同した花輪は、アメリカ五十州の生花でつくられたものである。

……

ひきつづいた翌一年間にも、またいくつかの訃告が発表された。そのなかの何人かの指導者は病死によるものであった。注意深い人

は、いつものようにそうした病名の公表がないことに気がついた。一人かかの指導者は輪禍による交通事故で死亡している。また二人の高級指導幹部は飛行機事故で災難にあい、そのうち一人は遺体もまだ発見されていない。

こうして、老練な指導者で生き残っている者は何人もなく、わずかに残留している何人かも相次いで退いている。

北京発のUPI電は、ある者が西単の民主の壁に「どうしたことか」と題する壁新聞を貼り出していると報道した。大衆は雪のなかを集会を挙行し、指導者の相次ぐ死亡事件について釈明し大衆のあいだに伝わっている一連の噂をはっきりさせるよう、当局に要求した。集会ののち、自発的なデモの隊列は、新築された三十階建ての中央井公斤ビル前に到達した。

従来、反応の鈍い「人民日報」と「紅旗」は、今回はすばやく反応して、「見逃すことはできない」という特約評論員の文章を発表した。「参考消息」(主に外電を幹部に伝える内部用の新聞——訳者)に載った外電は、中国共産党が最高級の会議を召集する可能性があるという推測を報じている。

一九九九年十二月一日。全国の主要紙はいずれも一面トップで一篇の短いコミュニケ——中国共産党第七期中央委員会第五回総会公報を掲載した。主な内容は、党の紀律検査委員会は責任をもつて最高検察院、最高法院、公安部が合同した専門調査機関をつくり、党の一名の副主席を責任者として、一連の中央指導者死亡事故で露呈した重大事件を調査する、ということであった。

十二月五日。「祖国の分裂を陰謀した反革命集團事件」の初歩的

な概容が公表された。國家のいくつかの重要部門の指導的要員も連座していた。

十二月七日。再び事件の模様が公表された。いくつかの主要な省・市の指導者も関係していた。

十二月九日。事件は軍大な様相を帯びており、その集團の主犯は党中央の某指導者であるばかりか、事件が根深い國際的背景をもっていることが一挙に明らかになった。

国外では、「國際的背景」とは疑いなくアメリカを指していると思われた。「ニューヨーク・タイムズ」はコラムニスト、ディック氏の「一人の偉大な人物の消失とともに、中国はまた神秘的な深淵へと沈みつつある」と題する文章を掲載した。

十二月十一日。中央委員会総会は、政治局と中央委員会を改組すると公表した。同事件に関係した者は一律に職務を暫時解かれ、一部の新しいメンバーが政治局と中央委員会へ補充された。同時に、以上のことは先例がないものでは決してなく、これらのすべての措置は次の党大会で追認されると説明された。

十二月十五日。司法部門にも、さらには本件の調査に当たっていた何人かの重要な指導者のなかにも「謀叛集團」のメンバーがいることが暴露された。中央は合同調査機関の改組を決定した。元調査責任者の一人が逮捕された。

この事件は國家の最高機密に及ぶので、取り調べはことごとく秘密裏におこなわれた。しかし、法の規定もあるので、公開の審理も何回かおこなわれた。被告は、その犯した罪状を隠さずに白状している。何人かの被告は、ひどく疲弊した様子を頭わに示した。彼ら

のために弁護することを指定された弁護士も、ただただ形ばかり弁護の素振りをするだけである。最高法院の前責任者は、このとき被告席にあってこんな名言を吐いた——「法はただ政治闘争のために用いられて最後にその尻ぬぐいをするおとし紙にすぎない」と。そのため彼はまた法律を攻撃した罪を犯したとされ、このことが彼への最後の判決に際して加算されるであろう。

十二月二十日。「祖国の分裂を除根した反革命集団事件」の罪状を示す材料が全面的かつ系統的に公表された。人びとをもっとも憤慨させたことは、彼らが昨年逝去した、久しく衆望をつないだ某指導の同志に反対するとともに、きわめて悪どい言葉で建国の元勳である毛主席を傷つけ、肯定すべき文化大革命を傷つけたことであつた。新聞やラジオが発表した一連の文章は、新しい党中央の周囲に必ず団結し、すべての反動勢力を粉砕しなければならぬことを表示した。各級の党と政府の組織もまた指示に基づいて各種の検討会を開催した。

十二月二十六日。毛沢東主席生誕百六周年である。宣伝はピークに達した。「人民日報」のトップの見出しは、「偉大な教師毛主席は永遠に全世界人民の心のなかの永遠に沈むことないもつとも赤い赤い太陽である！」であつた。

西暦二〇〇〇年がついに到来した。二十年前に人びとはこの年を幻想しはじめていた。世界各国はみなこの年を祝賀し、中国の慶祝ぶりは一層盛大であつた。しかし、当面まず第一になすべき工作は、基盤を固めて「謀叛集団」の社会的基礎を一掃する運動であ

り、上部構造の各領域と経済戦線での重大な改革を達成し、中央による高度の集権制を実行し、過度に分散して各地方や各企業に与えられた権力を奪回して、表面に現れない分裂の災禍を根絶するこゝとであつた。

審査と改革の運動は順調に進展した。九月になると、中国共産党は第十八回全国代表大会を召集した。

長時間の世論づくりを経たのち、中央委員会総会は二十年前からの誤つた路線の批判を正式に提起し、生前に中国共産党の工作を二十年の久しきにわたつて担つてきたある人物を批判し、広汎な人民の信任を裏切つた某指導者と、彼を頭とする党内ブルジョア司令部を批判した。

この一年間、八宝山のあの地上三階建て、地下五階建ての新しい葬儀館では、数百回となく名譽回復の追悼会と遺骨安置の儀式が相次いでおこなわれた。十月一日には、建国五十一周年の慶祝行事が盛大に挙行された。新しい中央指導グループが天安門の城楼に登り、五百万人の組織された大デモ隊を観閲した。主要指導者は、次のような重要講話を發表した。

党内のブルジョア階級を断固として徹底的に消滅し、二十二年前の悲劇の再演を防止しよう。

当面の改革運動を徹底的におしすすめ、一元化された指導を實現しよう。

イデオロギーのすべての分野で、覆り果てた西側の資本主義の影響を徹底的に一掃し、プロレタリア階級がすべての陣地を占領

しなければならぬ。

賃金を凍結し、人の思想の革命化を強め、ブルジョア的権利を制限・除去し、貧富の両極分化の問題を解決しよう。

外国資本を一掃し、対外関係を嚴格に規制し、自力更生の革命的な外交路線を実行しよう。

治安機構を強化し、大衆による独裁を推しすすめ、すべての分野でのブルジョア階級にたいする全面的な独裁をおこなおう。

ひきつづき、デモが開始された。

世界の最新鋭の国産サンダー型戦略ミサイル「霹靂Ⅲ型」が、初めて外国人記者のカメラの前に姿を見せる。

先頭の隊列を先導するかのように国産の「轟—20」戦術爆撃機と「殲—18」戦闘機の群れが、ごうごうと上空を飛んでゆく。

あたかも「餃子」の中身のように、全世界にとって一つの謎であった中国の武器体系が、一つの大アルミニウム鍋のような金属カバーに覆われて人びとのまえに出現したのであり、そのことよって引き起こされた震動は、中国の政局にたいする世界の注意力がある程度転移させたほどである。

先導の「豹式Ⅲ型」攻撃用戦車が広場を進む。

機械化された陸軍が広場を通過する。

強大な民兵……

青年たちは歓呼して躍りあがり、自分のこの一代の肩にかかっている歴史の重責を誇っている。

四十五歳以上の者は、一年來の国内情勢の変化に對面して、また

もや目を開き口をあけてぼんやり感じている。

十月二日。色とりどりの旗が風に翻える西単の民主の壁に「二十二年前にここに貼られた一枚の大字報」と題する一枚の壁新聞が貼り出された。署名は余燁。センセーションを引き起こした。

その壁新聞の冒頭には、こう書かれている。「二十二年前にここに同一の大字報が貼り出されたが、人びとは重視しなかった。筆者はあやうく『少数の悪者』の仲間に入れられるところだった。二十二年後、筆者が予想したそうした情景は、不幸にもことごとく出現した。昔の大字報を再現し、それを抄録してここに公表する。往時をふりかえり、今日感慨ひとしおであるが、そのことは二十二年後にとっても、意味があるのだ」

この壁新聞の正文は次のとおりである。

「日本の友人は先月（一九七八年十一月）、中国の関係者に向けて、答える者のいない問題をこう提起した——鄧小平副総理の講話（対日關係）は素晴らしい。だが来年は変わるのかどうか？ 中国政局の変化はつねならず、定めたばかりの法律が、一年後には覆えられて改めて制定される可能性あり」

「中国は人口が多く、国土は広大だが、経済発展と人民の生活改善は緩慢である。ただ政局のめまぐるしい変化の速度についてののみ、現代化されたどの国家も呆然として目を見張っている」

「このような現象は、世界の人びとがみな知っており、ただ、われわれの宣伝と正統的な觀念によって蒙昧にされ、盲目にされているにすぎない」

「なぜそうなのか？」

「それは、この國では高度の中央集権制が実行され、國家の安危がただ一人の人物の身につがっており、九億人民の運命が數人の手中に握られているからである。政治、經濟、法律などの權力が一元化された指導に独占されているからである。九億人の日常茶飯事や喜怒哀楽、一挙手一投足までもが、この數人の個人的な生理上の變化、習慣の愛好、精神状態および思想傾向の影響を受けてしまう。一人が代わればまるで天下も代わるかのようにであり、一人が死ねばその一代の法律も變更されるという有様である」

「この數百人、數十人、數人の個人が上部で激烈に格闘するたびに、九億人民は下において呆然とおびえて觀戦している。よい人が勝利すれば、國をあげて幸福になるので、希望は最後まで託されている。一つの細い糸に九億人の運命がかかっている。もしもこの人物が風邪をひいたら、全國もそのためにパニックに陥る。ひとたび予測の事態が生ずれば、暴風雨のなかに投げ去られて揺れ動く舟は、衆人こぞって悲劇となり、またどうやってその日の食をつないだらよいのかもわからず、運命が誰の手に託されるかもわからないではないか？」

「中國の民として生まれたからには、運命はかくなるべし、などといえるであろうか?! われわれは人間なのだ! 二十世紀七〇年代の人民なのだ!」

「鄧小平同志は疑言する……!」

右の壁新聞はここから先がはがされてしまったが、それは貼り出されてからわずか二時間もたっていないかった。さらに半時間もたつ

と、ただ標題だけがわずかに読めるにすぎなかった。

カナダの「トロント・グループ・アンド・メール」紙のアントニ記者は、時を移さずこの壁新聞の全文をカメラに収め、至急電報で本社に打電した。六時間後に彼は好ましからざる人物として国外退去を言い渡された。數百名の壁新聞読者は手分けしてこのニュースを四方八方に伝達した。

十月三日。税関は、その日の「トロント・グループ・アンド・メール」紙を全部押収した。カナダ外務省は中國大使を呼び出し、中國側が文化交流の取り決めに違反したと抗議した。

そのほかの各種の外國紙はひきつづき各新聞売り場で売られており、紙面には様々なかたちで壁新聞の内容が掲載されていた。午前九時になるまでに、各外國紙は全部売り切れてしまった。

十月四日。中國戲曲學院の校紙「ラップズボン」に載った文章は、壁新聞にたいする外電の各種の関連報道を概説し、そのなかで「トロント・グループ・アンド・メール」事件に言及するとともに、同紙の三日付の重要ニュースを部分的に転載した。校紙編集部が入手した「トロント・グループ・アンド・メール」は、中國に着いたばかりの一人の華僑のところからもたらされたものであった。文化部は、これにたいして嚴重な取り調べをおこない、最後には何人かの演劇界の知名な人士が表に出て、職を辞することを強制され、はじめて一件落着となった。

夜になると、民主の壁の前は人の山、人の海となり、早く来た人は、残っていた標題を見ることができたが、まもなく、それさえはがされて、なにもかもなくなってしまった。ある者は記憶にたよつ

て内容の概略を再現したが、これを貼り出すときにいざこざが起り、腕力ぎたになってしまった。夜十二時、一部の人は次々に退散したが、夜勤を終えた労働者もまた群れをなしてここに集まってきた。それは翌五日の昼までずっと続き、人の流れは絶えず、人の声は沸騰した。

五日午後五時頃、壁新聞の作者が公然と姿を現わした。五十歳前後の男で、典型的な中国人の顔つきであり、しゃれた服装をし、挙動すこぶる風采があり、話しぶりは飾り気なく真面目で、まったくみんながどのような論法で、どのように話したらトラブルを招かないかを知らないのに、彼の話しぶりの効果と彼のスマートな身体つきは、一躍に人びとを引きつけた。

彼は二つのレンガのうえに立って、壁新聞の内容を演説しはじめた。十分もたたないうちに、聴衆は数千人にも達した。西単の高速ハイウエーの下段の車道は群衆によって遮断された。

野次を飛ばす者があつたが、たちまちにして大衆にどなりたおされてしまった。群衆が多すぎる。私服の警官も手が下せなかつた。ある者がトランジスタ拡声器を手渡したので、彼はそれを受け取つて演説をつづけた。

このとき、数キロ離れたある一つの部屋のなかで、小型の受信機も音を出した。数名の重要人物が安楽なスウェーデン・ソファに腰かけて、耳を傾けている。

「……鄧小平同志は提案している。経済権力を下部に分散し、法律制度を健全化し、より多くの人びとに管理に参加させ、人民がさらに一歩権力に近づくこと、これが進歩である、と」

いま、男にとってロマンとは――

夕日と拳銃

檀一雄

現代の世代には想像もつかない雄大なドラマが、大陸のロマンが、いま我々の前にかえつてきた。



蒼洋社

最新刊!

灼熱

伊達宗義著 価一、二〇〇円

●「夕日と拳銃」のモデル伊達順之助の実録果しない夢とロマンに生きて大陸の露と消えたこの一代の風雲児を父に持つ著者が、父の生きざまを熱い血と涙で描く。

東京千代田飯田橋(英潮社)発売

「しかし、これらの一連の改革が一朝にしてなるのなら、それはまた一朝にして崩れやすく、なんらかの時期に、それに着手されたと同じ形式で再び廃止されてしまうことにも着目しなければならぬ。それがあの地位の高い人の権限で制定されたものであるのなら、それを廃止する権限をも彼はまた有しているのである。あれこれとこのように決定する人が同一の人物であることもあり、まったく異なった二人の人物であることもあり得る」

「この地位の高い人の権力は、すべての権力を統轄し、いかなる権力もそれに対抗したり、それを制約したりすることはできない。この権力中心の内部で矛盾や分裂が生じ、意見を異にするグループができ、彼らのあいだの闘争がまたきわめて激烈になり、甚だしきは問題を解決するたびにクーデター方式をとらねばならなくなることもあり得よう。だが、このことすべては、こうした権力の性質と形態を決して改変しはせず、ただこのような権力をますます強化するだけである」

「かつてある者は、このような権力方式のよいところをきわめて正確に指摘した。つまり、政策決定者が前進を決めるとき、決定をくだしやすく、騒ぎの起ることが少なく、破竹の勢いで、誰も阻止することができず、一個人が大衆から大きくぬき出した歴史的的地位を獲得することができる。しかし、このことは一種の病弊に等しいことにも注意すべきであり、もしも一旦くつがえされると、一瀉千里に、勢いは阻まれることなく、被害を受けるのは、やはり人民である。文化大革命のなかで出現した林彪、「四人組」こそは、そのもつともよき証明である」

「人は結局は死ぬものである。現在われわれを指導している先進的な古い世代の革命家も、いつかは相次いでこの世を去る。これらの純粋に個人の生理的な変化は、いま始まったばかりの偉大な事業を危うくすることができようか？ 一場の歴史的改革が権力の争奪によって押送され得るかどうか、前車の覆るを後の戒めとするのか、なお泥にはまりこむのか、その可能性がないわけではない。いわゆる憊病者は、まさにこの意思が……」

と、このとき、空は暗くなり、カメラ用のマグネシウム・フラッシュがピカピカと閃いた。二輛の大型乗用車から何人かの聴衆が降りてきた。人の群れが混乱しはじめた。警官もどこからともなく現われて、人びとに車道をあけるように要求した。

作者は演説をつづけていた。

「なにをなすべきか？ プロレタリア革命の指導者は……」

突然、一個の石つぶてが演説者の顔に飛び、血潮が口から流れだした。次いで腐った卵が、かたわらの人びとの頭上に投げ散らされた。人の群れは騒然となった。何人かのいかめしい大男が前へ殺到しようとしたが、しかし混乱した人の流れに押しつけられてしまった。

十二月六日。この壁新聞は宣伝ビラの形式で王府井の特級市場、西単の特級市場および天安门広場に出現した。北京駅の三十階の大様から撒き落とされたビラは、空中をちやうど十分間もヒラヒラしていた。人はみな仕事を中断し、眼は宣伝ビラに釘づけされていた。警官も氷のように冷たい目付きでこの不可解な白いものを注視している。それらの大部分は地面に到達するまえにどかへ消え失せ

てしまった。

北京市人民法院は今日、一件の上訴案件を受理した。高エネルギ―物理学を研究している一人の年青い女性教授が、第十三派出所の某工員を人権侵害罪を犯したとして控訴したのである。民主の壁の前の歩道で、その公安委員は女教授を引きとめ、彼女がもつていたピアを見て身体検査を強要し、さらに腰から下の部分を検査しようとして「その部分はつねにもっとも疑わしい部分」だから、といったという。公安委員はそのとき平手て耳を一発くらわされた。裁判官は法によって罰金五十元、監禁十日間を判決した。女教授が出獄するや、その公安委員は、上部からの電話による指示に基づいて自由を獲得した。女教授がまだ百メートルも歩かないうちに、誰かが一枚のピアを彼女を呼びとめて渡した。翌日、女教授の勤める研究所が出版している「鳴放」という学術出版物には、慣例を破って一篇の政治的文書が掲載されたが、そのタイトルは「最新発見のD粒子の構造から社会と政治の組織形態を見る」というものであり、その実際の内容は中身が少しばかり改変された例のピアであった。

六日午後三時、壁新聞の作者は新街口緑色居住区五十四号ビル四十七階の自宅で逮捕された。

全国唯一の半民間の刊行物「四・五報」は、自らの独特の発行形式で、最後の一号を発行した。第一面には壁新聞作者の大きなカラー写真があり、それと並んで「二十二年前にここに貼り出された大字報」の全文を掲載した。その後、このアマチュア編集者の全員が行方不明になった。その号の新聞は真貨品となり、闇市では一部五

元にもなって売られていた。

「なにをなすべきか? プロレタリア革命の指導者は、この問題を解決していない。マルクス、エンゲルスは社会主義国家の実体にはまったく触れなかった。レーニンも戦争のなかで最初の社会主義国家を樹立した。複雑な戦争の環境においては、鉄のような規律、強固な指導、権力を信頼できる革命家の手中に高度に集中することが必要であった。建國以後、革命の指導者はできあがった一個の軍事化されたグループとして国家機構に進出し、一步一步と正式な国家体制を形成した。それは旧社会の痕跡を有したが、また理論家たちの創造がそこにはあった。スターリンはこの体制を固めるとともに独裁の面を発展させ、それを多くの國家に伝えたが、わが國もそのなかの一つであった。このような体制の優越性は祖国防衛戦争の時期に証明されたが、しかし、平和の時期にはそれは失敗し、ごく少数の實権をもつ者と眞実をあえて語ろうとしない人びとを除いては、誰もこの点を承認することはできない。戦争の法則と経済の法則・生活の法則とはまったく異なっており、まさか諸君は、火を消してランプを燈せ」と命令しはしないだろう。全国人民がみな夜九時に眠ることができようか?」

「ブルジョア革命の時期には、かなり多くの戦争が発生しましたし、軍事化された体制と権力の高度集中が実行されました。しかし、ブルジョア階級が勝利したのち、國家体制を樹立するに際し、なぜこのような形式を放棄して共和制を採用し、政治、法律、経済の三権分立を実行したのか?」

「これは主に私有制の経済的基盤にかかわっているが、それだけが唯一の原因ではない。封建社会もまた私有制である。しかしその政治の特徴は専制と独裁であった。ブルジョア階級と彼らのすぐれた革命家は封建社会の教訓をくみとることに長じていた。まさに封建社会の専制は資本主義の自由発展を抑制し、資本主義経済の競争的性格は一切の専制を打破することを求めている。歴史上、資本主義体制には功績があったのであり、それは人類社会の生産力のきわめて大きな発展を促進し、現在にいたるまで最高の生産性を保持している」

「社会主義革命は資本主義の制度とすべての搾取制度に反対するものである。われわれは資本主義社会の搾取、競争および経済恐慌がもたらす災難をはっきりと目撃した。だからこそ、それを消滅させなければならぬのである。しかし、なぜ封建社会の専制、独裁および極端に残酷な超経済的搾取を資本主義社会のさらなる反動とさらなる暗黒にくらべて見ないのか？ とくにわれわれのこうした封建社会の一つの根深い極端は、資本主義が従来十分に発展してこなかった国で強い。われわれの目的は、資本主義社会にくらべて、さらに先進的な国家を建設することにあるのであって、資本主義の病弊はないが資本主義社会の国家におよばない国を維持することにあるのではない」

「われわれが西側の民主主義を採用すべきだというのであろうか？
どんなに頭脳明晰な人でもそれは不可能であることを知っている。その原因はいろいろあるが、その一つは、孫中山先生の死があまりにも早すぎたからであるかもしれない。」

「なにをすべきか？ 当面実行されている経済的権力と法律的権力を下置きせる政策は大いに正しく、大いに必要であり、わが国の発展にたいして必ずやきわめて大きな作用を引き起こすであろう。しかし、われわれは、ソ連の後塵を拝することで満足することはできない。ソ連はどんなこともやってきたが、人民に民主を与えず、大権の高度の独占が少数の政治的ボスの手中にあり、暗黒の独裁的統治を実行しつつある。将来、ソ連の経済的実力がアメリカを大きく凌駕し、軍事的力強が世界を支配するほど強大化するようになれば、このような制度もその致命的な弱点をさらしたままではなくなるであろう。その日がくるのなら、それはその専制とその崩壊のためである。このような制度を創立した人は偉大ではあるが、彼の統治権力がおよばない将来において、人びとは正確に彼の功罪を指摘することができるのかもしれない。人民が従来、そしてまた永遠に専制を認め得ないことは、歴史のある段階で賞揚されたすぐれた点であろう」

「われわれは経済上でソ連を追いぬかねばならないばかりか、その政治制度の比較においてソ連よりも優越しなければならぬ。われわれはすでに資本主義に反対し、また修正主義に反対しているが、しかし、もしもわれわれの優越性がなおそれらに及ばないのなら、われわれはどんな主義を目論見ることか？ それは人民に民主を与え、人民に真の権力をもたせ、名ばかりで実のない「主人公」の名称にすぎないことのないよう要求している。九億人民がみな命令をくだすことはできないけれども、彼らは自ら信賴してきた人が自分たちの家事を管理し得るようすすべきであり、同時に、正

しい監督権をもち、社会の「公僕」が気ままに主人をもてあそぶことが二度とないようにすべきである」

「監督権は、マルクス主義が大いにこの問題を重視している。レーニンは、最初の社会主義国家が成立したばかりの時期に、この問題をくりかえしくりかえし強調する必要を感じていた。だが、この問題は、結局のところ解決されず、プロレタリア革命運動の重大な課題となった。歴史は従来から結果の出ない問題を提起しはしない。いつの日かは、人民がこの一つの難題を解決するよう指導する人があらわれ、人民は将来永遠に彼に感謝するであろうが、それは彼が人民にもっとも大切なもの——自由と民主を与えたからにはほかならない」

十二月二十六日。法廷では大衆世論の強大な圧力のもとに、裁判を閉廷せざるを得なくなった。作者は被告席上で慷慨して陳述し、壁新聞の最後の一段をこうはっきりと述べた。

「いわゆる監督権は、かつて宣伝されたようなものでは決してなく、人びとが自分の意見をもつていて旦那様にちよつと見ていただくよう哀願するようなものだった。旦那様は適当に何度かまげかえして、二言三言で一人の人間が何年、何十年もの心血を注いだかもしれないことをすぐに否決してしまう。彼らが考える意見にたまま合えばすぐに採用されて体裁だけがとのえられる。ここでいうところの監督権は、人民が真に自分を主体にし得る独立した権力のことであり、もう少しはつきりいうなら、下僕をつくるような権力ではなくして、少なくとも国家の指導者と対等に振る舞い、さ

らには彼らを越えるような主人をつくる権力のことである」

「この種の権力は、政治、経済、法律など一連の内容を包括し、そのなかではとくに今日にいたるまで依然として無視されてきた何項かの人民民主の権力、すなわち選挙権、人身の自由権、宣伝権が包括されるべきである。國家の一連の重大な政策の改変に従って、人びとの思想の変化もこれに従うことを肯定するという、こうした民主的要求の提案は、情理にかなっているばかりか、遅かれ早かれ解決しないではすまされないとともにまで発展するのである」

「選挙権。人びとがみな大変よく知っているように、これは重要な問題である。だから党と國家の宣伝の道具がこの方面でつくった文章ももっとも多い。本来、人びとが投票用紙にもっとも自分が支持する人の名前を書くことは、いたって簡単なことであり、誰かがくりかえしくりかえし教え導く必要はさらさらないのである。しかし、熱心な人の宣伝のもとで、簡単なことが複雑になってしまったので、自己の願望を確かに表現できるかどうかという懷疑を人民に起こさせ、そのために上級任命制と終身雇用制をきっちり実行することになっている。これがすべて建國の基で、早くから定説があり、私の議論が功を奏するところではない。だが、人民はこの要求を終始放棄せず、百年たつてもやはり今日のように断固としているであろうし、時間が流れ去るに従って消失することはあり得ない。この要求は、どこかの「階級の敵」や「悪質分子」がつくりだして、それを用いて党と國家に反対するといったものでは決してなく、いかなる世代の人でも、年輩の人の影響がなくなるとも、みな自然のうちにこの

(月～金)ヨル6:00

FNN ニュース レポート

本格的60分ワイドニュース



- メインキャスター 山川千秋
 - キャスター＝逸見政孝/田丸美寿々
- FNNの総力を結集した多角的取材とキャスターの鋭い切り口、ソフトな語り口で説得力のあるニュース。ほかにスポーツ、文化など…文字通りのワイドニュース番組。



フジテレビ

問題を提起し得るのである。この問題は為政者にとっては、生死の関頭に立つほどの大問題であり、幾億万の民衆の生命にかかわる問題でもある。この問題が解決しないかぎり、人民大衆は子々孫々この問題を持ちだすだろう。もしかしたら誰かがこの問題を利用し、隙をねらって文章をつくるかもしれない。しかし、最大の利益を手に入れるのはやはり人民なのである。その残されている隙を他の人にねらわせているのに、われわれ自身にこの機会を利用させずしてどうして事をうまくやれようか？ もしも一個人が、これはむせぶを恐れて食を辞すことだといひだすとしたら、それは彼が白痴でないなら、別に下心をもっているのである」

「公民の人身権については、私は多く語ろうとは思わない。人民のために利益を計ることが、社会主義国家の根本目的である。だが名は主人でも、実は下僕である。下僕が主人の世話をすることは、翼

刺劇の出し物のなかで常用される題材である。大衆の「下僕」が民主を皿に盛って「主人」の面前に捧げもっていく。この「主人」はなんと見事なディナーと、なんと恭順な「下僕」をもっているのかと全世界に思わせることだろう。しかし、もしもどこかの無邪気な「主人」が民主にちよっとでも手をつけ専有しようとする、その後、「下僕」の懲罰は彼をしてこれから死ぬまで民主を考えただけですぐ恐れおののくことになる。中国人の実用的観点からすれば、民主はかなり贅沢なものであり、民主のために支払われる前途や家庭の幸福、生命の代価は、いささか算盤に合わないのだ」

「宣伝権。私はいささか多く話したいと思う。宣伝権の重要性は人びとがみな知っており、為政者は庶民に比べてもっとはつきり知っている。私がいいたいのは、庶民の理解力が低いということではな

くて、庶民の頭脳は、指導者に比べてもっと明晰でなければならず、この権利が庶民にたいしていうなら、電気冷蔵庫や自動車のよ
うな種類の高級品であり、かなり貧乏で、いささか奇想天外である
ことを知らなければならぬということだ。宣伝権をめぐって統治者
が奪い合っていたりすれば、それこそ人民に参与させることはでき
ない。双方がともに認めていながら、やはり人民が十分に参加でき
ないというにいたっては、原因はどこにあるのか？ 知るよしもな
い。これは一種の暗黙の了解であり、その種の地位にいた人は、
誰でもその含意を理解できるのだ」

「しかし、もしもあなた自身が政治を担当したときに、ちよつと不
愉快な思いをしても、死後になつても革命事業が天折しないように
保障したいのなら、あるいはさらに遠くのことを考え、あなたの名
前で始まる新時代を切り開きたいならば、それはあなたが真実をこ
めて人民に宣伝権を与えることである。人民に自主的な宣伝権がな
いのなら、人民の監督権なんてでたらめだ！ 人民が自己の宣伝権
をもち、さらに選挙権などがそこに加われれば、林彪や、四人組の
ような現象を生む根源を絶滅することができ、國家の安危が一人の
肩にかかっている、教億の人民の運命が数人の手に握られていると
いつた腐敗現象を变革できるのである」

「決して宣伝権を軽く見てはいけない。当然、為政者は軽く見るこ
とができないが、私は人民自身が決して宣伝権を軽く見てはならな
いということを知っているのである。もしも人民が自己の本當の心
の声を表現し伝える道をもっているなら、それは社会世論というこ
の強大な武器を掌握していることであり、自己の心がどこに向かう

べきかを真に掌握していることになる。民心の赴くところ、いかな
る人もそれを軽視しながら失敗しないということは、地球上にいま
だないのである」

「いくつか法律を制定することによって、民主や歴史の業績が天折
しないように保障することは、もしも動機に問題があるのでないな
ら、それを肯定することは、大きな過ちを犯すことになる。ブルジ
ョア階級の勝利の後、一連の法律が制定され、今日までずっと作用
してきていて資本主義社会の相対的安定と平穩を確実に保障してし
まっている。しかし、法律はただこのような保障の手段の一つにし
かすぎず、もしも宣伝の自由がなかったり、宣伝を監督したり制約
することがなかったなら、法律は沈黙のなかで、どれだけ多くの残
酷なことをしてかしたか知らないのである。アメリカの前大統領、
ニクソンのウォーターゲイト事件を引き合いに出すなら、これは、
本来法律という鉄の幕のなかでは沈黙できたのだが、宣伝権の働き
によって、その堂々とした大統領も弾劾を受け、辞職せざるを得な
かった。ただ法律上の民主は、『まやかしの民主』であり、人民に
宣伝の自由の保障がある民主こそ健全な民主である」

「人民に宣伝の権利を真に与えようと考えるのなら、具体的にどん
な方式を採用するかで容易に解決する。もしも名義上だけ与えて実
際に与えないのなら、どんな方式を採用するかという問題は、もつ
とも解決が難しい問題であり、甚しい場合は、何年、何十年、何世
紀も論争して解決に達することができない。実際には、ことがは
つきりしてきていて、しかも冒明したことは実行するというように、は
つきりしてさえいけば、われわれの党と國家、とくにそれらの指導

者が前言をひるがえす嘘をいわなければ、どんなこともすべて解決してしまふ。われわれは憲法上はいちはやく言論の自由、出版、集會、結社の自由を明記しているが、しかし、従来は実行の準備がない。もしも指導者たちがこれからはもう嘘をいわなければ、人民は自分がどのようにすべきかを知ることができるのである。言論の自由は当然、西單の民主の壁のような形式を含み、出版の自由とは、人民が自ら新聞や雑誌を刊行することを許さないことをいうのではない。政府も人民に意見を十分に発表させる出版物をいくつかつくることのできるかもしれない。そのほか、デモ、ストライキの自由もまた、人民が自らの心からの願いを表明する道である。強調すべきは、この自由は、当事者が仕事を失ったり、生活の基盤を失い、人身の安全と保障を失い、親戚友人を巻き添えにし、甚しきは監獄に入れられ、生命を終えるといった自由を二度と意味してはならないことである」

「もしも人民が、こうした主人になる権利を本当に有したならば、以上の利益のほかに、さらに一連の深い広範な影響をもたらすことができる。こうした民主教育は、中華民族の模相を一新させることができるのだ」

「それは、他のいかなる方式に比べても、人民の積極性をさらに発動し、経済と政治の急速な発展をさらに促進することができる」

「それは、人民が大層不満に思っている文学・芸術界の腐敗した塵芥を徹底的に一掃し、人民が喜んで見たり聞いたり、愛好して手放せない作品を大量に推進させるだろう」

「それは、社会の公僕を励まし懲しめ、官僚主義を絶滅し、いかなる人であろうと再び民意を無理に私することを許さないだろう」

「利点は必ずしもこれらにとどまらないが、それはただ中国が、これまで享受したことのない民主生活なのであって、具体的な情景を一々列挙することはできない」

「私はここで、万能の妙薬を押し売りするのは決してなく、これらの権利は、ただ空気を食糧のようなありきたりのものにすぎないけれども、人民にとっては、一刻も身から離せない生活必需品であると考えるだけである。人民の生活水準を高めるには、当然これらの内容も包括すべきである。誰かが彼らをいつも飢餓線上でもがかせているのを、どうして人民が許すことができようか！」

「もしもあなたが自分の事業は人民擁護の事業だと信ずるならば、これらのやり方を採用すればよい。このことが、専制および潜在する敵と張り合える唯一の力なのかもしれない。それは、何人もの生死や勝敗の代償ではなく、幾億万人の生命が途絶しないことの代償なのである。これまで、専制的統治者は、みなこのような力を恐れ、それを愚弄し、それを分散し、それを拒殺しようとした。なぜ社会主義國家も、それを恐れなければならないのか？ 甚しきは、封建帝王よりもさらに一層それを恐れているのではないか？」

「歴史は個人の意志を転移しはしない。あなたがそれに従順なとき、あなたは英雄である。あなたがそれに反対するとき、あなたは恥知らずである。信じないならば、前敵を見給え！ 現在は過去の

問題にいかげんに調子を合わせてもいいかもしれないが、あなたがこの世に別れを告げるとき、再び振り返って見るなら、悔を千古に残し、許すことのできない罪禍となるであらう。三十年後の評価は無情なものである。一人の偉大な人物の自由は、永遠に歴史の必然のなかにあるのであって、そのよってきたるゆえんを忘れてはならないのだ！」

これで、「二十二年前にここに貼られた一枚の大字報」の全部が終わった。作者は、宋代の陳亮の二つの詞を引用して、法廷での弁護のない弁論を終えた。

「落ちぶれて歌い昔遊ぶを記す

頭はかくの如くしてなお何ぞ求めん?

心を吐き尽くして余すことなし

口腹安んじて遠謀をのべる」

西曆二〇〇〇年の最後の日、作者は「祖国分裂を陰謀した反革命集団」の一員として、終身禁固の判決を下された。彼はこの集団のなかで、最初に判決を下された人物であり、また最後の一人であった。外電は、中国共産党のリーダーシップ内部に再び紛争が起これり、「事件」はなかったことにされる可能性があると報道した。しかし、この作者については、再び再審を求める者はなかった。もしも彼が本当にそのある集団に属していればよかったのだ。そうであれば、いつかは彼にも運が向いてふい立つ日があったかもしれない。

ない。

西曆二〇〇一年六月。アメリカの出版業者は、一冊のベストセラーで巨額の利益を獲得した。書名は「一匹の蟻を踏み殺す」、作者は余悸である。まえがきには、この本の原稿が中国の警戒防備の厳重な「異議申し立て者」の收容所から届けられてきたという、その曲折した経緯を述べていた。

同年九月。一人の囚人が石家荘西部のある労働改造犯の採石場の懸崖から転落。前日の晩、この囚人は、監獄の堅い床板に横たわり、いつものように五つの新しい英単語を暗記し、翌朝、目覚めてすぐにそれらを復習できるように準備、それから悲憤の情を抱いて眠りについたとき、一人の道学者然とした容貌がたましい国家工作員が、彼の檔案袋（中国で一般的な個人の来歴書の入った袋——訳者）を開き、赤鉛筆で彼の名前——余悸、これは偽名であるが——を丸くかこんだ。それから「事故、崖から落ちて死亡」と書き入れた。

十月一日。國慶節を祝賀するラジオの音が流れるなかで、一人のほっそりとした体軀の中年女性が平然とビニール袋一杯のガソリンを自分の身体に注ぎ、西単の民主の壁の前で焼身自殺した。壁新聞作者の顔とまったくそっくりの一人の女の子が、焼身自殺した女性と同様の大きな目をした男の子の手をひいて、すすり泣きながら、彼らを慰めてくれる道ゆく人の手に紙を一枚一枚手渡した。紙面には、ゆがんだあどけない字でこう書かれている。

「お父さんもお母さんも、民主のために死にました。

私たちが民主のために生きてるように残しました」

さらに著名なブルジョア革命の詩人、ペトローフイ（「立て、ハンガリー人よ、祖国は呼んでいる」の詩を書き、ハンガリーの一九四八年革命に大きな役割を演じたサンドル・ペトローフイのこと、一九五六年のハンガリー事件では反体制派がペトローフイ・クラブをつくった——訳者）の詩が一首書かれていた。

生命はまことに貴かるべし

愛情の価はさらに高し

もしも自由のための死ならば

両者いずれも棄つるべし

警察がこの二人の子供に注目しはじめたとき、彼らはもういなくなってしまった。

誰も彼らの行方を話そうとはしなかった。たとえ、尊敬し泣くに値する彼らの父母がいなくとも、その二人の見自うるわしい小さな顔は、人の心を痛ませた。

当日午後六時、民主の壁には七〇年代末期にここに出現したことのある二首の古い詩をまねた詩が二つ貼り出された。写し伝えた者によれば、これはその焼身女性の初期の作品だという。

唐代の陳子昂の「幽州の台に登る歌」をまねて

「前に自由を見ず

後に民主を見ず

天地の悠悠たるを思い

衆愴然として涕下る」

南北朝の「敕勒歌」をまねて

「民主の壁、西単の下

天は穹廬に似て四囲を蔽う（穹廬はモンゴルの包——訳者）

天は蒼々、人は茫茫

民主がわが邦にいたるはいつぞや」

夜十時、多勢の軍隊が何万という群衆を襲散らし、中国共産党の「人民に告ぐる書」の放送が聞こえるなかをブルドーザーが二十三年間にわたって築き立てたこの歴史的建造物を削りとってしまった。

一年後の同じ日。ここにたくさんの生花が献げられた。一つの特別に大きな花籠には、次のような二枚の札が掛っていた。「民主の壁の再建にどうか御寄附を」。その花籠一杯のお金は、一万元を下らないだろう。

午後。一台の豪華なセダン紅旗二〇〇〇型が道端に停まり、群衆のなかへ人の意表をつく情報伝えられた。ある政治局委員が花を献じたのだ。

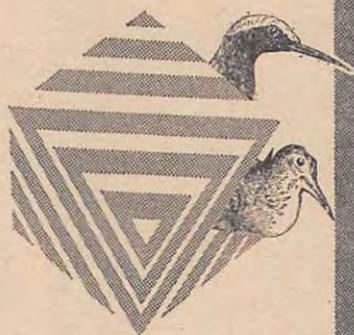
夕暮れ。電燈がともりはじめたころ、中国風とも西洋風ともつかない五〇年代のあの建物——人民大会堂を軍隊が包囲した。兵隊の重装備からみて遠方の省から移動してきた部隊のようである。

聞くところによれば、中では中国共産党の工作会議がまた開かれていたという。

(了)

亀井俊介かめい しゅんすけ
(東大助教授)

アメリカ性革命・再考



1
今年の夏、九州の雲仙で「現代アメリカ社会」というテーマのセミナーが開かれた。アメリカ研究の専門家三十人ほどの集まりで、いろいろな話題が出て、勉強になった。

その席で、私は「ユートピアの夢」と題する報告を行った。昨年十一月、共同生活を営んでいた九百余名の人々が集団自殺する「人民寺院」事件が起きたとき、私はちょうどこの宗団の本拠地のカリフォルニアにいたが、現地の新聞雑誌の反応に強い焦立ちを覚えた。どれもこれを、彼らを狂信徒として片づけ、ともに取扱おうとしない。だが私には、「人民寺院」がアメリカで長い伝統をもつユートピア運動の延長線上にあるもの思えた。彼らのコミュニティでは、個人の財産や由縁をすてた理想的な人間関係がはかられたのだ。

その破局は、だから、現代アメリカ社会の行きづまり状況と関係があるかもしれない。少なくとも、「人民寺院」の悲劇をアメリカ文化の問題として考えるだけの価値はあるはずだ、というのが私の提案だった。

その時の報告の中身で、いまちよつとふれ